

歴史上の女性たち：

松方美代

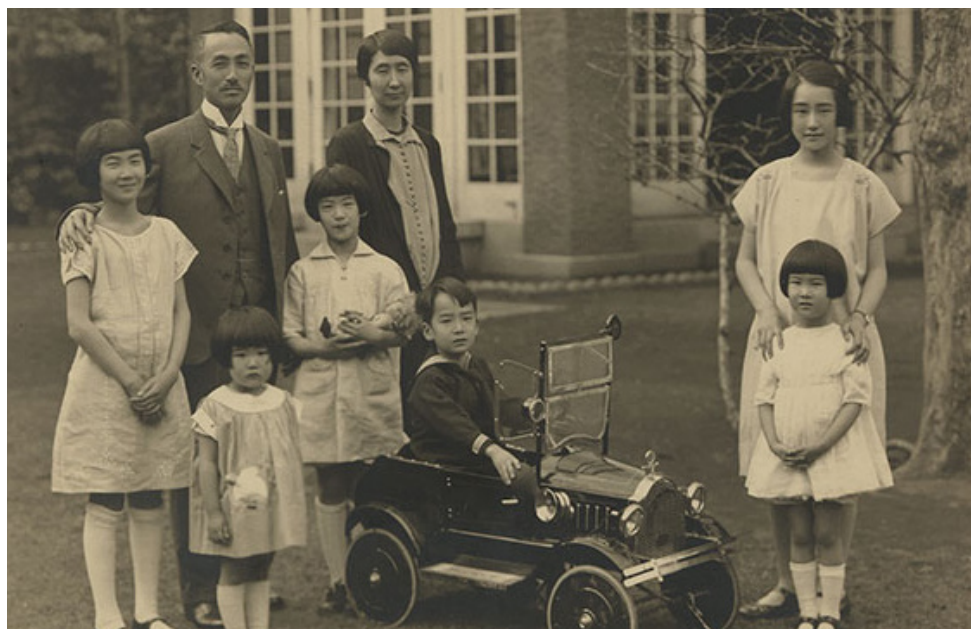


松方正熊と美代。今井兼一郎 撮影。ロメイン・眞知子提供。

キリスト教科学を日本に樹立するため、
力を尽くした女性をご紹介します。

松方美代 (1891–1984) は、日本人初のキリスト教科学者の一人でした。彼女は、新しく出会った宗教を、第二の祖国で心を尽くして献身的に見守り導いて行きました。そして、自分の信仰と、二つの文化的背景を持つという類 (たぐい) まれな生い立ちを貴重な力として生かし、西洋の宗教への抵抗や反発に、また第二次世界大戦中のさまざまな困難に立ち向いました。

ニューヨーク市で日本人の両親のもとに生まれ、彼女と兄は米国東海岸における数少ない最初の二世 (第二世代の日本人) と言われていました。米国での子供時代、彼女は、夏は、日本で、祖父母の元で過ごしていました。21歳のときに、日本に移り、日本の著名な政治家の息子、松方正熊と結婚しました。彼女にとり新しい文化になじむことは難しく、日本の伝統や慣習との葛藤に苦しみ、ついには健康を害してしまいました。²



松方家の家族、1927年頃。松方ミエ所蔵、岡ミミ提供。

- 1) Haru Matsukata Reischauer, *Samurai and Silk: A Japanese and American Heritage* (Cambridge, Massachusetts: Belknap Press, 1986), 245, 250–251.
- 2) Miyo Matsukata, “History of the Church Universal as Unfolded in Tokyo, Japan,” 7, Church Archives, Box 42561 Folder 285752.

1917年のことでした。その頃、**キリスト教科学**を実践していたのは、ほとんど西洋人に限られていましたが、松方は友人に誘われて、横浜で開かれていたクレアランス・チャドウィックによる**キリスト教科学**の講演会に出席しました。³⁴⁵彼女は、「**キリスト教科学**には、神性の**原理**があることを実感したとき、何という希望と喜びに目覚めたことでしょう」と、書いています⁶。その結果、彼女は、一人で**キリスト教科学**の勉強を始めました。同じ頃、二人の日本人女性 — 三井寿天（すて）と高木多都雄（たつを） — が、それぞれ、個々に、**キリスト教科学**に出会っていました。その当時この宗教を信仰するということは、「多くの厳格な慣習に挑むことであり」、当時この信仰を実践するためには、「調和を保ち賢く対応する能力、忍耐、知恵、愛はもちろんのこと、勇気が必要でした」。それでも、この三人の女性たちはみな、信仰に生きる決意をしていました⁷。彼らは、米国から来日していたキリスト教科学者で、学校の先生であったフローレンス・E・ポイントンに、自分たち、また自分の子供たちを教えることを頼みました⁸。松方は、「ポイントンは、土壌を整え、良い種を撒き、そしてその種が育つように世話をするなど、実に多くのことをしてくださいました」と語っています⁹。

1924年頃、松方と夫は、訪日したフランシス・サーバー・シールを自宅に泊まり客として招きました。シールは、以前、ドイツに**キリスト教科学**を紹介するために尽力しています。シール

3) Emi Abiko, *A Precious Legacy: Christian Science Comes to Japan* (Boston: E.D. Abbott Company, 1978), 14–15.

4) Matsukata, "History of the Church Universal," 7.

5) Abiko, *A Precious Legacy*, 14, 23.

6) Matsukata, "History of the Church Universal," 7.

7) Abiko, *A Precious Legacy*, 10–11, 16.

8) Abiko, *A Precious Legacy*, 17, 40.

9) Matsukata, "History of the Church Universal," 4–6.

を通して松方は、米国にキリスト教科学者のための学校があることを知りました。ミズーリ州のザ・プリンシピア（幼稚園から高校まで）と、イリノイ州のプリンシピア大学です。結局、松方の子供たちをはじめ、ポイントンの若い教え子たちはみな、海を渡ってプリンシピアで学ぶことになりました。¹⁰

日本人の家族のさまざまな結び付きや努力によって、**キリスト教科学**は、日本にゆっくりと拡がってゆきました。キリスト教科学者の最初の非公式グループは、1924年に集会を始めました。1931年に、米国、ボストン市の母教会（第一科学者キリスト教会）は、その非公式グループをキリスト教科学東京小教会として認可しました。¹¹ 文化的また言語学的な理由で日本語に翻訳することが難しい用語が多くあり、当時、人々は、**キリスト教科学**を英語で勉強する他はありませんでした。これは、キリスト教科学運動の成長を阻むものでした。一般の人々は英語を使っていませんでしたし、キリスト教もよく知らなかったからです。¹² 松方は、自分がニューイングランドで教育を受け、清教徒の考えを身につけていたために、メリー・ベーカー・エディの発見と業績を理解することができたと考えていました。¹³

しかし、この新しく現れた日本のグループは、第二次世界大戦中に最大の試練に見舞われます。米国参戦の前から、日本は西洋の影響を受けたものや活動を制限し始めていました。東京の

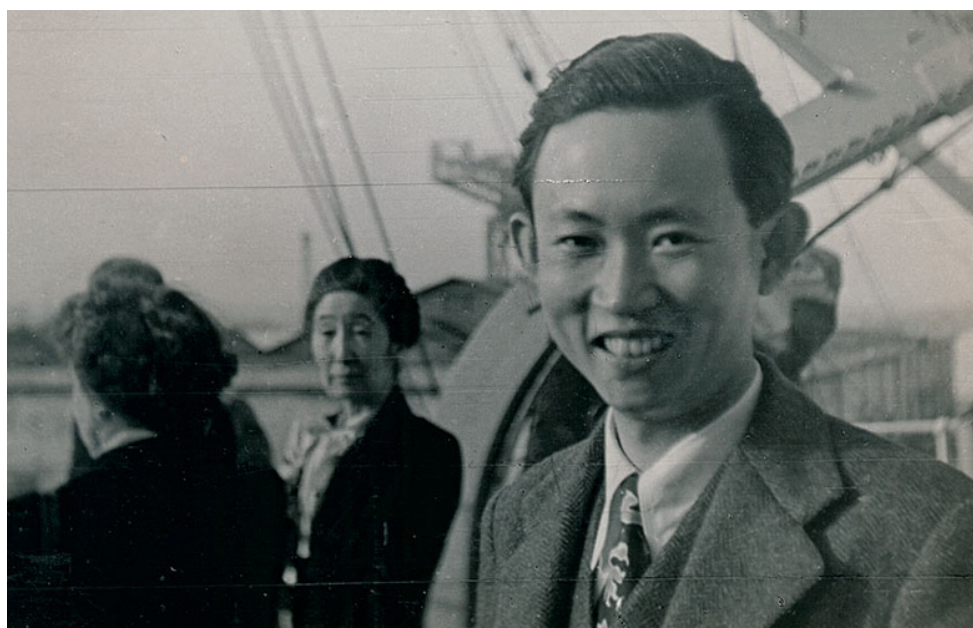
10) Abiko, *A Precious Legacy*, 29.

11) Abiko, *A Precious Legacy*, 22–23.

12) Abiko, *A Precious Legacy*, 24, 102–104.

13) Miyo Matsukata, “In the Christian Science textbook ...”, *The Christian Science Journal*, June 1969, 321.

小教会は、キリスト教の全宗派が「日本基督教団」のもとに一括される法律が制定されることを知り、1941年に解散しました。フローレンス・ボイントンをはじめ、西洋人はそれぞれ母国に戻りましたが、**キリスト教科学**の礼拝は1942年4月の東京大空襲¹⁴まで、松方家でひそかに続けられていました。



岡孝、1940年代頃。岡ミミと岡孝提供。

その後、孤立の時代に入り、日本のキリスト教科学者たちは世界から、また特に母教会から切り離されたように感じていました。松方も、はじめはこの孤立感を抱いていました。しかし、彼女は、「存在は、展開である」という記事——*The Christian Science Journal*（ザ・クリスチャン・サイエンス・ジャーナル）1941年1月号に掲載されたメリー・サンズ・リーの記事——の中の「神性の進歩は、個人的であると同時に、普遍的である」という言葉を読み、強い衝撃を受けたと、後に書いています。松方は、この言葉により、「何ものも神性の愛¹⁵から自分を切り離すことはできない」ということに気づき、これが、戦争の日々

14) Abiko, *A Precious Legacy*, 69–71.

15) Matsukata, “History of the Church Universal,” 14–15.

を通して、自分たちも結ばれているという意識をよみがえらせてくれた、と後に書き残しています。岡孝は、*The Christian Science Monitor* (ザ・クリスチャン・サイエンス・モニター) 紙の特派員になりましたが、彼は、戦争が始まったとき日曜学校の生徒でした。彼は、後に、松方が母教会との強い一体感を持っていたことをよく覚えていると語っています¹⁶。彼女はまた、スウェーデンの友人から、松方家の隣に住んでいた中立国スウェーデン公使ワイダー・バッジに外交文書として送られてくる、**キリスト教科学**の出版物をひそかに受け取り、日本のキリスト教科学者たちと分かち合い、彼らの孤立感を和らげることができました。

1945年に戦争が終わり、日本のキリスト教科学者たちは、外の世界と再び交流することができるようになりました。戦争中、松方や他の家族の子供たちは米国のプリンシピア大学で保護されていましたが、母親たちは、4年ぶりに子供たちと連絡しあうことができるようになりました。一方、西欧のキリスト教科学者たちが、占領軍の軍人として、従軍牧師として、モニター紙の特派員として、また、ボランティアの活動家として、到着しました。再び、日本の人々は、新しい友人たちと、さまざまな経験を共にしながら、公に**キリスト教科学**を実践することができるようになりました。松方の家族は、1945年にクリスマス・パーティを開きました¹⁷。著者、安孫子笑は、このパーティを、「悲惨な環境のなかで経験した初めての輝かしい場」と呼んでいます¹⁸。

16) Takashi Oka, "The power of love for church in wartime," *The Christian Science Journal*, May 2003, 10.

17) Abiko, *A Precious Legacy*, 85–87.

18) Abiko, *A Precious Legacy*, 89.



1945年のクリスマス、日本人とアメリカ人のキリスト教科学者たち。岡ミミと岡孝提供。

松方は、1969年6月号のジャーナルに、**キリスト教科学**が自分の子供たちにもたらした恵みについて、証しを発表しています。具体的に、病気の時のことに言及し、「それぞれの病は効果的に癒され、それにより私たちは常に、**キリスト**による癒しをより深く理解するようになりました¹⁹」と書いています。彼女は、癒しを実践する人として、初めてジャーナルに登録した日本人のキリスト教科学者の一人でした。彼女はこの仕事を1947年から亡くなる1984年まで続けました²⁰。これらの日々を通して彼女は、初めは孤島のようにであった自分の宗教が、日本で成長してゆく姿を目の当たりにしました。その中には、1962年出版開始の**キリスト教科学**の雑誌『キリスト教科学さきがけ』、そして、1976年出版のメリー・ベーカー・エディ著『**科学**と健康—付聖書の鍵』の日本語版が含まれています。後者は、日本語しか使わな

19) Matsukata, "In the Christian Science textbook ...", 321.

20) Abiko, *A Precious Legacy*, 14.

い**キリスト教科学**の生徒たちが、はじめて、母国語で**キリスト教科学**の教科書を勉強することができるようになったという点で、特に意義深いものです。

松方をはじめ彼女と共に働いた人々は、今まで述べたこと、また、新時代を切り開くさまざまな画期的な活動を実現するための、土台を築きました。安孫子笑は、彼らは、「将来の世代のために貴重な遺産²¹」を残したと書いています。

21) Abiko, *A Precious Legacy*, 117.